

15 自閉症寮におけるユニット制導入の効果と課題 ～3ユニットの実践報告～

国立秩父学園くぬぎ寮 関 剛規 林 克也

西多摩療育支援センター 吉野 邦夫

【問題と目的】国立秩父学園くぬぎ寮は、自閉症および重い知的障害をもつ成人男性の生活寮である。現在 17 名（A ユニット 7 名、B ユニット 7 名、C ユニット 3 名）が在籍し、そのうち 1 名を除いて自閉症または広汎性発達障害の診断を受けている。

平成 12 年 8 月、それまでの大集団に対する支援から、3 ユニットに分けることが可能な建物に変更した。しかし、開設当初は強度行動障害への緊急的対応と建物の構造的な問題から、完全ユニット制の実施を先延ばしにしていた。そのため、しばらくの間は実質的にはそれほど変わらない生活が続いていた。平成 17 年 1 月 5 日、構造的な問題を補いながら完全ユニット制を導入し、生活単位を物理的に小さくした新たな生活を開始した。穏やかで質の高い生活を目指した基本的な考え方と経過、今後の方向性について報告する。

【方法】

- ・小さな集団になることで、QOL の向上を目指す。
- ・個別支援計画の充実を図る。
- ・マニュアルを整備して、ユニットごとの業務割り振りを徹底する。
- ・寮内にビヘイビア・コーディネーター（BC）を新設し、活用する。

（BC は、必要に応じてユニットを超えて利用者の IEP に参画する役割をもつ）

【結果】

- ・利用者同士が、相互に過剰に刺激し合う機会が激減した。
- ・落ち着いた環境の中で、個別プログラムの実施が容易になった。
- ・IEP や各種マニュアルの整備をある程度完成させることができた。
- ・緊急支援が必要な幾つかのケースを、BC がプロジェクトを立ち上げて解決に導いた。
- ・個別の支援を展開する条件が整備できたことにより、OJT に基づいたスーパーバイズ機能を充実する必要性がより明確になった。

【考察】3 ユニット制の導入によって利用者や支援スタッフそれぞれの集団が小さくなり、音刺激の減少、適度な生活空間の確保、キーパーソンスタッフの明確化など多くのメリットが得られ、生活全体が穏やかになった。小規模な集団で生活することは、行動障害を二次的障害につなげない大きな環境要因であり、初期段階では個別の支援を円滑に行う必要要件である。

利用者への直接支援を含めて、全ての業務は『計画→実行→評価』のサイクルが、適切な時期に的確に行われているかどうかことが重要である。今後は、これまでの個別支援計画を定期的に見直しながらか、更新していくことが課題である。そして、利用者同士の相互作用を促進しながら、社会資源の活用を含めた余暇時間の充実を図り、更なる QOL の向上に寄与したい。